

## 放屁論争

首藤 静夫

太宰治『富岳百景』の有名な一節。

とかくして頂上についたのであるが、急に濃い霧が吹き流れて来て、頂上のパノラマ台といふ、断崖の縁に立つてみても、いつかうに眺望がきかない。何も見えない。井伏氏は、濃い霧の底、岩に腰をおろし、ゆつくり煙草を吸ひながら、放屁なされた。いかにも、つまらなさそうであった。

最初の妻との心中未遂、精神を病んでの破天荒な生活。こんな太宰を見かねて井伏鱒二は山梨県の御坂峠に彼を呼んだ。ここは富士山の眺望で有名な峠だ。井伏は先に来てここの旅籠で執筆していた。冒頭の一節は、二人がそれぞれ一段落し、近くの三ツ峠に登ったところだ。井伏は太宰よりひと回りも上だが、お互いに気が合うのか太宰の面倒を良く見た。太宰も井伏の言うことなら従順になることが多かった。この一節は、井伏の大切な人となりをも、うまく表していると思う。ところが活字になった作品を見て、井伏はクレームをつけた。

「僕は放屁していない」

「確かに放屁なさいました」

「いや、していない」

「なさいました、微かに二度……」

……

どっちでもないではないかと思うのだが、二人とも引き下がらない。この後、井伏は太宰に手紙で、今後は僕のことを一切書き物にしないでくれと注文をつけた。太宰死後も井伏は放屁問題に度々触れている。ここに二人の作家気質の違いがでていると思う。井伏は淡々とあるがままに、やや遠慮がちに書くタイプだ。「晴釣雨酌」、村夫子の雲囲気がある。それに対し、太宰はさまざまな色つけを好む。読者サービスというか、多彩である。濃い霧でつまらない景色だけ描いてもツマラナイ、そこで井伏に放屁させたのか、太宰ならありうることだ。

OBペンクラブの諸氏もさまざままで、個性が作品によく出ている。よその文章教室のように、型にはめこんだ指導をせず、それぞれ伸び伸びと書いている。

ちなみに僕は太宰流にフィクションを入れるほうだ。皆さん、気をつけなすって下さい。